

# キモンの陶片追放と帰国

鈴木雅也

四五〇年代のアテナイは、その内政、外政に於て大きな轉換機を経験した。内政に於ては、六世紀のクレイステネスによつて確立された保守的傾向の政治より、民主政治の時代に入り、外政に於ては従來の傳統を破りスパルタとの間に、所謂第一回ペロポネソス戦争を開始するに至る。ベルシヤとの間には依然として戦争状態が続いているため、アテナイは此処に二正面作戦 (Zwei-Fronten Krieg) をとらざるを得ない状態となる。しかもエジプトに於けるベルシヤ軍はアテナイ遠征軍に大打撃を與え、此のため四五〇年代の後半、アテナイは一轉して和平政策に向う。<sup>(註1)</sup>スパルタ及ベルシヤと平和条約が結ばれる。ペリクレスとともにアテナイの生んだ最もすぐれた軍人にして政治家キモンの追放は四六一年であり、その死は四五〇年である。彼の追放及政界復帰、その死は此のアテナイの重大機にいかなる影響をもたせられたか。本稿はキモンの動きが主としてアテナイの外政に及ぼした点に重点を置き、此の時代の動きを探る。

(註1) Thuc. I. 104—112.

—

キモンはその卓抜な軍人としての才能を父ミルチアデスよりうけついでいる。父はベルシヤ戦争に際し、有名なマラトンの野に於いてアテナイに勝利をもたらせた將軍であつた。キモンも亦、若年の頃サラミスの海戦に際しすでにその勇氣を以て世に知られた。<sup>(註2)</sup>戦争の技倆にかけては、天才テミストクレスに劣らず、しかもその性高貴で正義心に富む点、テミストクレスを抜きんでいたと称せられる。<sup>(註3)</sup>

サラミスの海戦の直後主として小アジア方面の諸都市はベルシヤの復讐を怖れ、アテナイを中心として第一回アテナイ海上同盟（デロス同盟）を結成する。<sup>(註3)</sup> 四七九—八年將軍に選ばれて以後のキモンは専ら同盟艦隊を率いてエーゲ海の各所に於けるベルシヤ軍を撃破する。四七六—五年、ストリュモン河岸のエイオンに於てベルシヤ軍を破り、<sup>(註4)</sup> 四七五年にはスキュロス及カリュストスを占領している。<sup>(註5)</sup> ベルシヤは四七〇年代末期、次第に反攻の準備にとりかかり、パンフィリアには二〇〇艘のフェニキア艦隊が待機しつつあつた。キモン指揮下の同盟艦隊はエウリュメドン河に於て水陸両面より敵を痛撃して圧倒的勝利を収めた。<sup>(註6)</sup> 此の勝利はアテナイ及同盟の今後の發展を決定づけ、恰もエーゲ海はアテナイの内海と化する觀があつた。四六五年キモンは一轉してエーゲ海北岸のケルソネソスに於けるベルシヤの殘留軍に向い、四艘の艦隊を以て敵艦十三艘を捕獲して勝利を収める。<sup>(註7)</sup> タソスの島の反乱は、同盟加入國の離反であり、ベルシヤとの關係は見られないがキモンは激戦の後之を降し、タソスの支配下にあつた金礦エンネアホドイはアテナイの手でうつるに至つた。

(註1) Plutarchos, Kimon 5

(註2) Plut. Kim 5. キモンの性格人物に關し古典の伝えている所は、必要に応じて註記する。キモンの人物に關する文献には次の如きものがある。

Swoda, H. Kimon, Realency clopédie, XI. Berve, H. Fürstliche Herren zur Zeit der Perserkriege, Die Antike, 12, 1936.

(註3) Thuc. 1. 95, 96.

(註4) Thuc. 1. 98.

Plut. Kim. 7.

(註5) Thuc. 1. 100, 101. Plut. Kim. 12, 13.

此の勝利は四六〇年を以てキモンが cf. Bengtson, H. Griechische Geschichte, München, 1950, P. 179, n. 1.

(註6) Plut. Kim 14.

(註7) Plut. Kim 14.

アテナイ及同盟は外にあつてはベルシヤの反攻を抑え、内にあつてはタソスの反乱を鎮め、同盟の基礎を固めた。之等内外の成功は一にキモンの活躍に負うていた。彼の名声は今や絶頂にあつた。しかしながら此のタソスに於ける彼の成功は意外の暗影を彼の今後の生涯に投ずる。

タソス攻略戦に於て金鑛エンネアホドイを占領した後、キモンは容易にマケドニアに侵入し、広大な地域をアテナイのために分割せしめ得る立場にあつた。しかしながらキモンは何故か此のアテナイ人の希望を満足せず、タソス攻略を以て戦をうち切つた。四六三年頃アテナイ市民の一部は此のキモンの行動を非難し、彼がマケドニア王アレクサンドロスより賄賂を受けとり、マケドニア攻撃を中止したと称し、遂にキモンを弾劾するに至つた。後にアテナイの指導者となつたペリクレスは此の時始めて彼の政治的發言を行い、先輩キモンの彈劾演説を行つた。キモンは此の告発にもかかわらず無罪となる事を得たが、彼の生涯に於ける最初の受難たるを失わなかつた。(註)

タソスの抵抗は極めて頑強でキモンは此の攻略に二年余の時日を要した。此の間タソスは密かにスパルタに訴え援助を請うた。スパルタは背後よりアテナイに侵入シタソスの請に應じようとする直前、突然大地震のためタソスとの約を果し得ないのみか、スパルタの奴隸(イロス)は反乱を起シイトメに立てこもりスパルタを悩ませた。此のためスパルタは逆にアテナイに援助を求めざるを得ず、(註)此処にキモンは軍をひきいてイトメに向つた。しかしながら優勢なアテナイ軍が到着すると、スパルタはアテナイ軍に怖をいだき口実を設けてその援助を断つた。好意を無視されたアテナイ軍及市民はスパルタの非礼に対し憤慨を禁じ得ず直ちに報復手段をとつた。即、当時スパルタとの間に戦争状態にあつたアルゴスとアテナイは直ちに同盟を結び、(註)此処に公然とスパルタと相對立するに至つた。

キモンは親スパルタ的人物として知られている。此のアテナイに充滿する反スパルタ的鬱閉氣は直ちに反キモンの感情に結びつく。さらにアテナイ内部の政争が加わる。キモンの外征中四六二年、エフィアルテスは大膽な民主的改革を実行し、ペリクレスも亦此の動に同調した。(註)キモンは帰國すると此の改革に対し反対の立場を明らかにし、ブルタルコスによれば彼は六世紀以來のクレイステネスにより確立された貴族的政治の復活を意圖した。彼の意圖は民主派の攻撃的となり、反スパルタ的空氣と相俟つて四六一年キモンは陶片追放に処せられた。傳統的なスパルタとの

提契及貴族的共和政治の巨頭は遂に十年の間アテナイを去らざるを得なくなり、アテナイは四五〇年代の變革期に突入して行つた。

(註1) Plut. Kim. 14, 15.

Plut. Perik. 10.

(註2) Thuc. 1, 101, 102.

(註3) Thuc. 1, 101.

Aristophanes, Ligs. 1137 ff.

スパルタの陸軍は精強を以て知られて居たが陣地攻撃は必ずしも得意ではなかつた模様である。又地震はスパルタ市民の多くの生命をうばつており市民軍は劣勢となつてゐる。スパルタとアテナイを結ぶ可きパン・ヘレニック同盟がとにかく存続してゐた事は事實である。cf. Gomme, A.W., A Historical Commentary on Thucydides, Vol. 1, 1345, Oxford, p. 300. ツキジデスは奴隸の反乱は十年目を以て終つたとのべてゐるが(Thuc. 1, 103, 1) タヌス攻略戦中の此の反乱は四六五年もしくは四六四—三年の間でなければならぬ。従つて奴隸の反乱の終末は四五六もしくは四五五—四年でなければならぬ。しかしながらツキジデスは此の終末を、メガラとの同盟及エジプト速征の直前に置いてゐる。エジプト速征は四六〇—四五九年に始まる。従つてツキジデスは此処に一つの混乱を生ぜしめてゐると思われ、Searcy の語は恐らく誤りであらう。反乱の終末は四六一—六〇年もしくは四六〇—五九九年であらう。cf. Gomme, A.W., op. cit. pp. 401—411. Bengtson, H. op. cit. p. 183, n. 4.

(註4) Thuc. 1, 102.

悲劇作家アイヌキュロスは当時発表された作品中に此のアルゴスとの同盟にふれてゐる。

Aeschylus, Eumenides, 287, ff.

(註5) プタルコスの伝える所によれば彼は自ら二人の子供にラケダイモニオン(スパルタは別名ラケダイモンである)エレイオス(スパルタの位置するペロポネソス半島中の地名)と名づけた事により知られてゐる。又彼は他の人を非難する時に「スパルタ人はその様な事をしな」と云つたと。

Plut. Kim. 16. Bengtson, H. op. cit. p. 177, n. 5.

(註6) 此の改革に關してはツキジデスは伝えてゐない、史料は次の如くである。

Aristoteles, Ath. Pol. 25.

Plut. Kim. 15.

Diodoros, XI, 77, 6.

アリストテレスは此の改革にテミストクレスが加つてゐる如く記してゐるがもとより誤りである。

Meyer, Ed. Geschichte des Altertums, IV<sup>2</sup> 1. P. 536 ff.

Busolt, G. & Swoda, H. Griechische Staatskunde, II, 1926. P. 894 ff.

Bengtson, H. op. cit. P. 184.

(註々) Plut. Kim 15.

#### 四

ツキジダスの傳える所によればアルゴス、テッサリアとの同盟を結んだ後、アテナイはコリントスと争いついでエジプトの大遠征を決行する<sup>(註一)</sup>。しかしながらツキジダスはイトメに於ける事件を記しながらも、キモンのその後の運命については一言もふれていない。更にツキジダスは筆を轉じて一卷一〇五より一〇八に互る間スパルタとの間に遂に戦火を交えるに至る事情をのべている。従つてイトメ撤退後アテナイの対外活動は從來にない積極性を具え、アジアの大國ベルシヤ及全ギリシヤの覇者を以て自ら任ずるスパルタを一手に引きうけ果敢な戦を開始する<sup>(註二)</sup>。ベルシヤ戦以來の傳統であるスパルタとの協調を棄て去り、反スパルタ的立場に立つに至つたのはイトメに於ける屈辱に由來するとともに、親スパルタ派の巨頭キモンはすでにアテナイを去つて國外にあり、スパルタに対する戦いに有力な反対者の存在しない事に原因する事は明らかである。

キモン追放とエジプト遠征はいかなる關係にあるであろうか。ツキジダスの傳える所によればエジプトの隣國リュビア王イナロスはベルシヤに対して反乱を企てエジプトの大部分を之に同調せしむる事に成功し、更にアテナイに援助を仰いだ。アテナイは之に應じ当時恰もキュプロスにあつた二〇〇艘の艦隊を直ちにエジプトに派遣した<sup>(註三)</sup>。之がエジプト遠征の開始の事情である。しかしながらキモンもしくはペリクレスでさえも、此の遠征についていかなる役割を演じたかは史料的には明らかにされ得ない。アルタルコス・キモン傳及ペリクレス傳はともに此の問題に関し完全

に沈黙を守つて居り、ツキジデスも亦國內事情を傳えて居らず、且つ遠征開始の時期も明らかに示されては居らな  
らば当然キモンは遠征に關係せざるを得ない。特に從來のキモンの戦歴を通じて見ても知られる如く強硬な反ペ  
ルシャ主義者として彼が此の対ベルシャ遠征の推進者であつてはならない理由は見当らないのである。従つてキモン追  
放と遠征の關係は此の二つの事件の前後關係を明らかにする事により決定される。

ベロツホ (J. Beloch) によればエジプト遠征の破局は四五六年であり、且つ遠征の開始は四六二一年としてい  
る。<sup>(註4)</sup> 此の見解はキモンの積極的な反ペルシャ精神が当然此のエジプト遠征に反映して居らねばならずキモンこそは  
遠征の提唱者でなければならぬとする点とデイオドローロスが傳える年代にその根拠を置いてゐる。ミルトナー (F.  
Miltner)、レンシヤウ (Lenschau, Th.) は、ベロツホ説に従う。<sup>(註5)</sup> エジプト遠征が前後六年の歲月をついやした事は  
ツキジデスの指摘する如くである。従つてベロツホ説に従えば遠征の終末は四五六年初夏、即アルコン年にして四五  
七―六年となる。四五〇年代の歴史はベロツホの年代体系を基礎として組立てる時、他の重要な史料との間にかなり  
の矛盾を生ずる。

エジプト遠征に於ける破局は後述するであろう如くアテナイをして從來の對外政策に於ける積極性を放棄せしむ  
る。先ず敗戦の直後デロス同盟の本部及其の金庫はデロス島よりアテナイに移された。ペルシャ軍の進攻に備えるた  
めである。同盟加入國の支拂う貢税はアテナイに於て集められた。貢税表の示す所によればアテナイに於て徵集され  
た第一回の貢税は四五四―三年と年代づけられる。敗戦の危機に対処するためにとられた手段として、此の敗戦より  
第一回の貢税徵集との内の三年の歲月の介在する事は理解し難い。何故なら同盟本部のアテナイ移轉はベルシャの追  
撃を避けるため最もすみやかになされる可きであるからである。<sup>(註6)</sup> ツキジデスは一卷一〇四に於てエジプト遠征の開始を  
のべ、ついで筆を轉じてギリシャ本土に於けるアテナイの活動をのべハリエイス、ケクリユパレイア、アイギナ<sup>等</sup>に  
於ける戦が相ついで記されている。此の一連の戦は四五九―八年頃の事件である事は史料の明らかとする所である。<sup>(註7)</sup>  
ベロツホに従えばそれ故ツキジデスは四六二―一年の遠征開始をのべてその後三年の間の事情を何も記す事なく一〇  
五に於て本土に於ける戦況をのべる事となる。此の間の空白は彼の記述に於ては異例に属する。後に一卷一一二に

於て同じく三年の空白時代が残されているが、ツキシデスは明らかに彼の記録しない一時期の存する事を銘記している。何等の理由を示す事なくツキシデスが三年の空白をその記述に残す事は考え難い。

此の三年の空白は何を意味するであろうか。云うまでもなく遠征の開始を三年近く誤つて解釈する所に理由が存する。さきにのべた如く此の年代づけの根拠は史料的にはディオドロス依存にある。ディオドロスの年代は屢々混乱している。彼は遠征の終局について異つた二つの年代をあげている。従つて一方的には信拠し難い。<sup>(註9)</sup>次にペロッホはキモンの政治精神としての反ペルシヤ主義を遠征に結びつけている。しかしながらキモンが遠征を提案し、その後彼は追放され、しかも彼の提案した政策がその政敵によつて六年間忠実に実行されたと考えられるであろうか。明らかに不合理である。<sup>(註10)</sup>更にツキシデスが暗示する如く遠征はイナロスの反乱にもとづく偶発事件であつて、独立した意図を以て始められてはいず、キモンの政治精神を此の中に見出す事は困難である。<sup>(註11)</sup>

かく見るならばペロッホ説がエジプト遠征の開始をさかのぼつて解釈しすぎる事は明らかであり、遠征はキモン追放後四六〇—五九九年頃に行われ従つてキモンは之に対して何等影響力をもたぬと見る可きである。

(註一) Thuc. 1, 104.

(註二) Thuc. 1, 105.

パリ・ルヴブル博物館所蔵の戦死者表はアテナイ・エレクテイス族の戦士中が同一年に各地に於て戦死したものの名をとどめている。四五九年もしくは四五八年に属する、之によればアテナイはギリシヤ本土よりアジアにいたる間の各地で戦をつづけた事が明らかである。

Tod, M.N. Greek Historical Inscriptions, Vol. 1, 1951. Oxford. No. 26.

粟野頼之祐、出土史料によるギリシヤ史の研究、昭和二十五年、岩波、二五一頁

(註三) Thuc. 1, 104.

エジプト遠征に関する年代上の問題及び遠征の結果については、拙稿、アテナイのエジプト遠征及其の敗戦の年代的考察、関西学院史学(Ⅰ)一九五三、及アテナイのエジプト遠征に於ける敗戦の結果について、神戸女学院大学論集(Ⅱ)参照

(註四) ツキシデスが此の遠征に関して年代にふれているのは、此の戦が六年間経続した事と(一卷一一〇)、ペルシヤ軍の最後の攻撃が一年六ヶ月を要した(一卷一〇九)事の二点である。

(註6) Beloch, J. Griechische Geschichte, 11, 2, 202 ff.

(註7) Milner, Fr. Pericles, Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft von Pauly-Wissowa, XIX, 754. Lenschan, Th. Brusian Jahrschrift, cclxi, 1938, 237.

但しレンミヤウは、遠征の決定はキモン追放前であるが、実際の遠征は追放後に於て行われたとしてゐる。後述註参照

(註7) Meritt, B.D. Wade-gery, H.T. McGregor. M. F. Athenian Tribute Lists. Vol II, 1949, P. 8.

敗戦と移転の關係に關しては拙稿、アテナイのエジプト遠征及其の敗戦に於ける年代的考察五一頁以降参照

(註8) Tod, op. cit. 26.

(註9) Nesselhauf, H. Untersuchungen zur Geschichte der Delisch-Attischen Symmachie, Klio Beiheft, XXX, 1933, P. 6, n. 1.

(註10) Gomme, op.cit. P. 107.

(註11) 遠征が開始された時、同盟艦隊はキネプロス島に於て行動中であつた。たまたまイナロスの請により艦隊はキネプロスよりエジプトに派遣された事はツキジデスの明らかにする所である。(Thuc. I. 104)

## 五

エジプト遠征直後より開始されるアテナイのギリシヤ本土内の各地に於ける轉戦は從來見られる事のなかつた新局面である。ペルシヤ戦争以來のスパルタとの協調はタソス戦まで経続してゐる。タソスはスパルタにアテナイ攻撃を依頼してはゐる。しかし上述の如く之は実現される事なく終つた。アテナイの反スパルタ行動の開始は明らかにイトメの屈辱以後の事である。ツキジデスの傳える如くイトメ事件後アテナイはスパルタの敵である。アルゴス、テッサリアと同盟を結ぶ。(一卷一〇二)。ついでアテナイはイトメの対スパルタ反乱軍をナウパクトスに迎え入れてゐる(一卷一〇三)。その後エジプト遠征が始められ、引きつづいて此処にはじめてスパルタ、アテナイの兩國軍隊が交戦に入る。即ハリエイヌ、ケクリュバレイア、アイギナ、メガラと各所に戦端はひらかれ次第に激烈を加えてくる(一卷一〇五、一〇六)。すでにさきにあげた戦死者表は明らかに之等の地で戦死した者の名をあげてゐる。此の様に見るならアテナイの反スパルタ的行動はイトメ事件後に始り、四五九―八年至りついに兩國の間に戦を交えるに



至るまでに激化している事が明らかとされよう。此の様な轉換機の始りをイトメ事件の直後に置く事も亦充分に可能である。キモンの追放自体此の様な反スパルタ的環境の中に行われた。しかし同時に彼の追放は四五九年以降の爆發的な対スパルタ戦の途を開いた。

メガラに於ける戦まで(註一)は同一年度に戦われている事は戦死者表の碑文に一括して記され、且つ同一年にと刻記されている事により知られる。一連の之等の戦がいかに激烈であつたかはメガラに於ける戦いはもはや正規の市民軍をつかい果し老人と少年のみで編成した軍隊をミノロニデスの指揮の下に派遣している事により知られる(註二)。

スパルタは終始ボエオチア及コリントスと結び、アテナイは常に同盟軍を率いて戦うのであるがメガラに於ける戦の後ボイオチアのタナグラ、つづいてオイノピュタが戦場となつている。さらにアテナイの將トルミデスは艦隊をひきいてペロポネソス半島を迂航しついに敵の本拠スパルタの造船所を焼きはらい、カルキスを占領しシキユオン人を破りさながら破竹の勢でスパルタに迫つている(註三)。

アテナイ人は此の時エジプトに於ける遠征軍の戦況を知る事なく対スパルタ戦を遂行しつゝあつたがやがて突如として遠征軍の苦戦が傳えられ、五十艘の増援艦隊が送られるが、たちまち之もメンデス河口に於てうち敗られ、かくして遠征は六年の戦の後完全なる失敗に歸した(註四)。

エジプト遠征軍と本國との間の連絡が充分でなかつたため、苦戦中の事情を知らず、スパルタ戦は続行されつゝあつた。ミノロニデスはテッサリアに兵を進め、ペリクレスはアカルナニアに進軍しつゝあつた、しかし之等両者は何等目的を達する事なく帰國している。即エジプトに於ける悲劇的結末がアテナイに知らされたのは此の時であつた。全軍事行動は即時停止され、全軍はアテナイに集結されたのであつた。此処に敗戦にとまらう次の轉換機が存する(註五)。

(註一) 此の年度は戦争年度であり冬に始まり晩秋に終る一年である。

Meyer. Ed. op. cit. III, 591.

(註二) Thuc. I, 105.

(註三) Thuc. I, 108. タナグラ戦のみはアテナイ軍が敗れた。

(註四) Thuc. I, 109, 110. ッキキオスは一卷一〇四に於てエジプト遠征開始のべて一〇九まで何等之に言及していない、即一〇四で知られている戦況以後は、エジプトより何等の連絡がなかつたのであろう。一〇四に於てはアテナイは有勢であ

る。従つて一〇九以下の敗報はアテナイにとつて全く予想外であり、そのうける心理的打撃は大きかつたと思われる。

(註5) Thuc. I, 111. 此の二つの遠征は敗報後におこされたのではない、ツキジデスは、敗報到着後に於て取りあつたつてゐるが、この二つの遠征は敗報以前に出発し、各々勝利を収めつたつた、その時エジプトより破局の悲報がもたらされた、その後遠征は有利に進行しつたつたが、重大な危機に備えて中止された。ネッセルハウフの所謂「突然の痲痺」である。エジプトに於ける軍事的損害はツキジデスによれば二五〇艘の艦隊の全滅である。クテシアスによれば之を下さむる数字があげられてゐる筆者はクテシアスの伝える所を妥當と思う。 cf. Weatlake, H. D. Thucydides and the Athenian Disaster in Egypt, Classical Philology, Vol. XLV, 1950, Pp. 209—216.

拙稿、アテナイのエジプトに於ける敗戦の結果について

## 六

ツキジデスはつづいて三年の空白の時代の介在をのべ、その後スパルタとの平和条約の実現を報じている。(註1) 此の平和条約はエジプトに於ける失敗により、従來の積極的対外政策の轉換を余儀なくせしめられた結果である。此の他デロス同盟の本部は敗戦後直ちにアテナイに移されその翌年第一回の貢税がアテナイに於て徵集されている。危機に際して即時とらる可きはづのスパルタとの平和のみが何故三年後に結ばれたのであろうか。しかしながらデイオドロスは平和の実現を四五四—三年と傳えて居り、敗戦が四五五—四年であるとすれば之は最もふさわしい時期である。(註2) しかしながらツキジデスのもつ信頼性は多くの学者をしてツキジデス説に賛成せしめてゐる。

デイオドロス及プルタルコスはこの平和条約のアテナイ側の責任者としてキモンの名をあげてゐる。キモン追放は四六一年であり、もし彼が正規の追放期間を國外に於て過したならば彼は敗戦の直後は未だ帰國してゐない。従つて敗戦直後にスパルタとの平和が実現したとするならば、キモンは正規の追放期間を経ずして帰國を許されて居らねばならない。プルタルコスはキモンは追放後國外にあつてもアテナイのために働き、とくにタナグラ戦の際にはアテナイ軍の苦戦中、友人とともに故國の軍隊を助け、之が原因となつてタナグラの戦の翌春、追放解除となつたと傳えている。(註3) 更にテオポポンボスの断片八八はキモンは追放五年以内に帰國したと傳えている。(註4)

之等一連の史料の指し示す所は明らかである。キモンは追放後五年以内に帰國して居り、エジプトに於ける敗戦の

直後にスパルタとの間に和平を結ぶ可き立場にあつた。キモン以上に対スパルタ和平工作を進めアテナイの危機を救うにふさわしい人物はあり得ない。しかしながらヴィラモヴィツ・ミュレンドルフ以下ペロッホ、ウオーカー等々はツキジデス説をとり、和平を敗戦の三年後に置いてゐる。さきにも述べた如く三年間の空白時代は理解し難い。何故なら同盟本部の移轉等の敗戦に備えた他の政策は直ちに実施されてゐるからである。キモンの早期帰國に對してペロッホはプルタルコス・キモン傳一八を否定して居り、ヴィラモヴィツ・ミュレンドルフ以下は、もしキモンが帰國して居るのなら、帰國後敗戦に至るまでの間のキモンの行動を古典は何等傳えて居らないとのべ、早期帰國に反對してゐる。しかしながらペロッホはプルタルコスが帰國にまつわるエピソードとして傳えてゐる事柄を否定してゐるが、之は必ずしも帰國そのものを否定する事にはなり得ない。又ヴィラモヴィツ・ミュレンドルフののべる所に対しては、ペリクレスでさえ屢々数年にわたりその行動が傳えられていない時期も存する事もあり、古典の傳え残してゐる所もあり得るため、キモン帰國の否定に對する決定的条件のうち之を加える事は不可能である。

以上の如く見るならばキモンは四六一年の追放後四五七年タナグラ戰の直後、タナグラ戰に於ける彼の働き、及その後アテナイが予期してゐる戰爭に對して彼の非凡な軍事的才能に期待する所大きかつたため追放を解除された。エジプトに於ける敗戦の直後、危機に際してスパルタとの和平がアテナイ存立に必須の条件となつた時、彼は再度アテナイの政界に主要な役割を演じたと見る可きであらう。ツキジデスの言う三年の空白が平和の前に存在した事は誤りで  
(註3)である。

(註1) Thuc. I, 112.

(註2) Diodoros XI, 86, 1.

(註3) Plut. Kim. 18.

(註4) テオヘンホスはプルタルコスの史料とされてゐた。

(註5) Von. Wiliamowitz-Moellendorff, U1. Aristoteles und Athen, Berlin, 1893, ii, 293, 7.

Walker, E.M., Cambridge Ancient History V, 467—9.

(註6) Baloch, op. cit. II, 2, 209—11.

(7) Gomme, op. cit. 327.

(8) ッキッテヌは一―二に於て三年の空白時期の後平和の締結をのべその後キモンの指揮下にキプロス遠征が企てられたと報じている。三年の空白時期は従つてヒム、ヘンクトゾーンの解釈に従いキユプロス遠征の前、平和締結後に置く可きで平和は危機に対処する諸政策とともに敗戦直後にとられたと解す可きである。 Gomme, op. cit. 395. Beutson op. cit. 196. n. 4.

Suzuki, Tsuneya

## Ostracismos and Recall of Kimon

### Resume

Kimon was one of the most popular strategi and politicians of Athens of the first half of the fifth century B. C. He was famous as anti-medist and laconist, and he belonged to conservative party. He was Ostracised in 461B. C, after the revolt in Thasos was put down by Athenian army conducted by him. After his ostraciomos Athen began the war against Sparta and the expedition to Egypt against Persia. Since Persian war Athen had been maintainig peace with Sparta, The war against Sparta, therefor, means that Athen changed her foreign policy. I research the relation between the change and ostracismos of Kimon, in this article.

The catastrophe of Egyptian expedition in 455/4 B.C. brought about a military crisis to Athen. Athen could not help to change her foreign policy again. Athen concluded peace with Sparta. According to Plutarchos (Kim), Kimon was recalled about 457 B.C. after the war in Tanagra. If Plutarchos tells true, Kimon the laconist must play an important part to conclude peace. I will make clear the date of recall of Kimon and his participation in concluding the peace.